

【青丹よし】あをによし(その1)

八世紀の東アジア諸国は大唐帝国の出現に触発され、自国の国造りに懸命に励んだ時代でした。日本も例外ではなく唐に習い小長安というべき条里制による都市計画を試みました。それは藤原京に始まり平城京で一応の完成を見るのです。

かつて朝鮮半島では唐・新羅の連合軍に同盟国百済が滅ぼされ、大和朝廷は外交上孤立してしまった時期がありました。そうした事態を打開し再び遣唐使を派遣し辿り着いた成果が平城京建設・大仏開眼だったのです。これらの事業は古代国家完成を内外に示す大プロジェクトであったといえましょう。

「青丹よし」はいうまでもなく奈良(寧樂)に掛かる枕詞です。丹とは土のこと。青丹とは青い鉱物系の顔料・染料となる土のことです。

「玉藻よし=讃岐」「麻裳よし=紀伊」など当地の特産物に「よし」を付けて枕詞とする例があるように、奈良山産出の青土から枕詞となったのです。

- ・あをによし寧樂の都は咲く花の薫ふがことく今盛りなり 『万葉集』小野老
〔奈良の都は咲く花が香るように今が盛りであるよ〕

平城京の華やかな都ぶりが感じとれる歌ですね。

「青丹よし」は平城京遷都以前からある枕詞です。しかし、この歌の印象があまりに強いためあたかも平城京の枕詞であるかのような錯覚すら覚えるのは私だけでしょうか。

意外にも、この歌は平城京で詠まれたものではなく、都から遠く離れた大宰府での宴会の席で詠まれた歌なのです。小野老の昇叙を祝う宴であったようです。

当時、筑紫国大宰府には大伴旅人・山上憶良を中心に筑紫歌壇とでもいうべきサロンがありました。

この歌は天平元年(729)春に詠まれたと思われませんが、同年の二月、都では藤原氏の陰謀により謀反人に仕立てられた長屋王が自害するという痛ましい事件が起きました。世にいう長屋王の変です。

筑紫歌壇の中心大伴旅人は長屋王に近かった人物です。事件の直後、旅人は緊張と不安の日々が続いたことでしょう。しかし、部下である小野老の昇叙によりひとまず緊張は和らいたものと思われる。そうした状況のもとで宴会は行われました。

『万葉集』巻三 328～351 に従えば、宴会の出席者は大伴旅人・山上憶良・沙弥満誓・大伴四綱・小野老です。旅人の息子であり後に『万葉集』を編纂する大伴家持(当時 12 歳)も同席していたことは想像できます。だからこそ私的な宴会の即興的な歌が一連となって『万葉集』に残されたのではないのでしょうか。

この一連の歌を詠み進むと、突然不可解な歌に出くわします。

奈良の都を懐かしむ歌が続く中で、突然山上憶良が妻子を気遣って帰宅します。

有名な「憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も吾を待つらむぞ」の歌がそれです。

憶良の帰宅後、旅人は酩酊したらしく、酒で憂さを晴らす内容の歌をくどくど詠み続けます。（「酒を讃むるの歌」十三首）

飲みだしたら止まらない享乐的で激情型の旅人、家族思いでリベラリストの憶良。筑紫歌壇を代表する二人ですが、歌風の違いから必ずしもそりが合ったわけではないように思われます。憶良の早々の帰宅はその証ではないでしょうか。

次回には、これら歌の内容を口語の会話文に改め、宴会の様子を再現してみましよう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~